早期発見後押しする保険も

がん社会を診る

中川 恵一

がんは少々進行しても症状が出ないことが多い病気です。ましてや、早期がんでは無症状のことがほとんど。がんは痛い病気、苦しい病気といったイメージがあるようですが、これは末期がんの話です。がんは「症状を出しにくい病気」と認識を変えてもらう必要があります。

私は「自己超音波検査」で14ミリのぼうこうがんを発見して、内視鏡切除を受けました。血尿はおろか、全く症状などありませんでした。

さて、最新鋭のコンピューター断層装置（CT）を使っても5ミリ以下の肺がんを見つけることはできません。私のような放射線診療の専門医でも、1センチ程度にならないと、がんの診断は困難なのです。

早期がんの定義は複雑ですが、2センチ程度までのがんを指すと考えてよいでしょう。つまり、診断可能な早期がんとは1～2センチの大きさのがんといえるのです。

1センチのがんが2センチまでに成長する時間は、がんの種類によりますが、おおむね1～2年。この大きさのがんが症状を出すことはほぼありませんから、体調万全でも、絶好調でも、1年あるいは2年ごとに検査を受けなければ、がんの早期発見は困難です。

国は、胃がん、大腸がん、肺がん、乳がん、子宮頸（けい）がんの検診を推奨していますが、とくに、乳がん、子宮頸がんのがん検診受診率は4割程度と、米国の半分のレベルに低迷しています。

さらに、新型コロナによるがん検診の自粛によって、がん患者数が減っています。その結果、早期がんの発見が減り、進行がんが増えています。

こうした中、明治安田生命保険は、乳がんと子宮頸がんの検診を受診して異常がなかった場合、2万円の給付金を支払う新たな保険商品を6月に発売しました。がん検診の受診を後押しするとともに、女性の健康増進を応援したい考えのようです。

「万が一、病気になったときの備え」という従来の保険の概念にとらわれず、がんの早期発見を後押しする新タイプの保障といえるでしょう。

先日、この保険の開発担当者と会う機会がありました。

「日本のがん検診受診率を向上したい」、「女性の将来への不安要素を和らげたい」という思いから、開発を思い立ったそうです。

「がんには、明確な予防法がなく、いつだれが罹患（りかん）するかわかりません。だからこそ、がんともっと身近に向き合うことや、がん検診受診の重要性を伝えられればと思っています」とのこと。「がん検診受診による早期発見で、お客さまの健康で、笑顔あふれる未来を守りたいという思いを込めています」という言葉が印象的でした。

（東京大学特任教授）

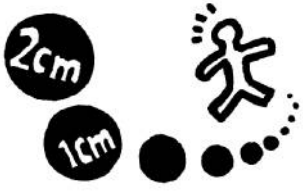

イラスト　中村　久美